橘曙覧５首について

（１）安政４年（1857）　「若くさ」

「しけ(げ)りあふ　杉よりおくの　鳥居こ(ご)し　白く咲るは　梅にや有らん」

【解説】　茂りあう杉よりさらに奥にあり、鳥居越にかいまみられる、あの白く咲きだしたものとは、梅ではありませんでしょうか。

（２）安政３年（1856）　「若くさ」

「あたねつき　そめき(染め木)か(が)汁に　しめ衣　神の心は　赤きにそ(ぞ)よる」　全歌集未掲載

【解説】　「赤根草」の汁で染めた衣装です。神様のお好みは、赤の色（正直な心の色、大事な血の色、神聖な宮の色）を重んじて選ぶことです。
この上句は、古事記に基づき、「八千矛の神（オオクニヌシ)」が正妻スセリ姫に贈った歌の語句です。

（３）嘉永７年（1854）　「嘉永甲寅（きのえとらつきなみはつかい）月並初会之歌」

「たく(ぐ)ひなき　聖の御よ(代)の　例には　先君か(が)代を　いふへ(べ)かりけり」　全歌集未掲載

【解説】　前例のないほどの聖の御代の例としては、先ず君が代を挙げるべきです。

（４）嘉永６年（1853）　「嘉永癸丑（みずのとうしつきなみはつかい）月次初会之歌」

「安国の　中にとりても　安御代の　いまの大御世に　ます時はあらし(じ)」　全歌集未掲載

【解説】　平和に栄えているわが国では、今の御代よりもすばらしい平和な御代はありませんでしょう。

（５）嘉永５年（1852）　「嘉永壬子（みずのえねつきなみはつかい）月次初会之哥（うた）」

「男山　さか行　御代を思ふには　楽しきことの　また麓なる」　全歌集未掲載

【解説】　男山の天満宮　－　山を登るように、わが国をますます発展させなさる御代の様子を考えますと、楽しみもまたこれからで、登ろうとする山の麓にいたったにすぎないのではありませんでしょうか。

解説：カレル・フィアラ県文書館副館長